



微熱発光体

sari-sari

それはもう、神様がすこぶる機嫌がいいときに創ったんじゃないかっていうぐらいだ。(ねえ、君は知ってる？ 神様を主語に持ってくる時、つくる、は天地創造の創のやつを使うってこと。僕は知ってる。この間、塾の先生がこれはヨダンだけど、って話してた。……あれ、ヨダンで漢字はどう書くんだっけ。四段？ 夜男？ ヨルオトコって少しカッコいい。うーん、ヒマができれば調べておく。それよりも、この塾の先生ってのがさあ、都心のお嬢様大学に通ってるらしいんだけど、なんつうか、って話は長くなるから、チャンスがあればまた別のときに)

つまり、僕が思うに神様の機嫌と、あとおそらく肩の調子がいいときに、クラスメートの吉行(よしゆき)はるかは創られた。

使われたはさみは二丁で、NASA(アメリカ航空宇宙局。おっ、今日は正式名称をぱっと思いついた！)製のものが一つ。

これは、惑星探査機が上陸して、あっちこっち動き回ったせいで、畑の作物が荒らされたと怒る火星人が存在しないとも限らないので、その襲撃に備えて秘密裏に開発された、ごついやつ。

もう一つは、東京下町のどこかで長年床屋を営むおやじさん愛用の、華奢なやつ。

ある朝、慣れ親しんだ相棒がこつ然と姿を消したことに心を乱されたおやじさんは、飲めもしない酒にはしり、女房子供に当たり散らして、家庭不和が生じたとか生じないとか。

とにかくそれらを使って、アルプスの澄んだ水で織られた工作用紙を、そう、夜中にこっそりキッチンで冷蔵庫のドアやお菓子の包み、もしくはペットボトルの炭酸のキャップを開けるときぐらい、息をこらして慎重に(ついでに言うと、深夜のハンターの多くは音を立てちゃって、家族に見つかり、挑戦は失敗するわけだけど)神様は一ミリの狂いもなく人型に切り抜くことに成功した。

ここまで行ったら、あとは買い付け作業。すらっとしたモデル体型のオタマジャクシ二匹を仕入れて、眉毛。信頼のおけるリスから、粒のそろったいいドングリを二つ調達して目に。おばさんウサギに頼んで(もちろん、実際に交渉するときは、おねえさんウサギさんと呼んでいる！)、彼女が育てているえらく形のいい無農薬白ニンジン(なんだかの金賞を受賞したとかしないとか)でもって鼻を。四月には長期出張におもむく春一番に、お土産として桜のつぼみをリクエスト。これでくちびるを描いた。

うん、そうに違いない。だから吉行はあんなに可愛らしいんだ。へへ、まいっちゃうな。(え、そんなののどこがって？ 分かってないなあ。手に入れた品々を細心の注意でもって各パーツに置いたのち、神様マジックをかけるんじゃないか。そうすると可憐な美少女ができるんだ。……そのマジック何だよって？ あれだよ、あれ、……神様の手からビームがすげえ出るんだよ。うん？ 子どもそんなんじゃできなくねー、だって？ ばれたか。そう、本当はキャベツ畑で、……だめ？ コウノトリがねえ、……これもだめですか。しょうがない、白状しよう。子どもは男女二人一組で、って話はまだ昼間だし、別の機会に話すつもりもないから、個人の自主学习にゆだねた！)

「……くん、き……るの！？ は……ページ……なさい！」

だれだ？ 国語の時間にしゃべって、授業をぼう害している奴は。今は、物語を作ってみよう、のときじゃないか。

ざわざわざわ。周りにもぎやかになってきたぞ。やめろよ、背中を突っつくなって。

「おい、……ってば、野上おい！ やばいぞ、あっ……」

おしゃべりに僕まで巻き込むなよ、国語の勉強に集中したいんだ。ん、目の前が少し暗くなった。雨雲？ 積乱雲？ 理科の時間？

「のおがみくうん！」

！！！！！！ 僕の脳みそ直撃で雷が落ちて、全身を電流がかけぬけた。雷の仕組みと注意すべきこと、理科の時間に習ったかもしれない。でもすべて忘れてしまった。そのとき僕は何をしていたのだろう。ああ、今日と同じく吉行のことを考えて、心の中でひとり国語の授業を展開していたんだ。（たしかその日は、吉行をテーマに作文を書いたような……）

「さっきから何回呼んだと思ってるのっ」

おそるおそる見上げた先には、雷神、を祖先に持つとしか思えないぎょうそうをした赤松先生がいた。ヒステリー持ちで、顔を真っ赤にしてどなるから、陰で赤オニと呼ばれている。怒った赤オニを見上げながら、オニに加えて雷神も僕の中で先生のあだ名にしようと思った。TPOに合わせて使い分けるのだ。

「名前を呼ばれているのに、どうして返事をしないんですか！？ まあ！ 今は弥生時代のことを学んでいるのよ。なぜ一人だけ大航海時代のページを開いているの。あなた、分かってる？ この時間とても無駄なのよ、あなた一人のために皆を待たせてっ」

と一気にまくし立てた。それから、「みいーんな」と言いつつ首をぐるりと回して、教室全体を見わたした。

「こうしている間にも、授業を先に進めてほしいと思っているの。それがあなたの返事をしないという無駄な行動によって、阻まれてしまった。わたくしだって本当は怒りたくありませんよ、時間の無駄ですもの。ほうら、どんどん時間が過ぎていく！」

僕の目の前に赤松先生の白いぶよぶよした腕が突きだされた。肌の手入れがいきとどいて、つややかなのが気持ち悪い。上目づかいのミニーマウスが微笑む、金色の鎖の腕時計を指さして先生は叫ぶ。

「一秒二秒三秒！ この無駄の原因を作ったのはあなたなのよ野上君！」

はん、と鼻を鳴らし、先生は僕の顔をのぞきこんだ。目が合うと、先生は顔をぐにゃっと変形させ（これが笑顔だというのなら、なまはげだって大爆笑してるってことになる）、とっておきみたいな猫なで声（おそらく猫即死）で語りかける。

「ね、皆に言わなきゃいけないことあるわよね。ほら、立って」

僕の肩に手を置き、立ちあがるようにうながす。さわるなよ。息が上がった先生の胸元で、ブラウスのフリルがゆれていた。無駄っていうなら、僕もそうかもしれないけど、そのフリルもじゃないですか？ 僕はゆっくりと立ち上がり、深呼吸をした。

「……ごめんなさい」

何がくやしかったって、謝るときの条件反射で頭をひょこっと下げちゃったことだ。でもきつと、誰も見ていないだろう。

僕たちは半径三メートル以内の非常事態には、あわてず騒がず、無表情というお面をつけてやり過ぐす。ちょうど赤松先生の腕の脂肪くらいの、ぬるくてやわらかすぎる自分たちの世界を守るために。僕たちの処世術、というにはあまりにも無邪気でさりげないから、暗黙の校則ぐらいのものだ。抜き打ちで先生が調べなくても、毎日自分たちで目視で確認しあっているから大

丈夫。

僕は赤オニ松に対するせめてもの反抗で、座ってよしの許可が出る前に腰をおろした。そのときに素早く教室を見回すと、ほら、皆やっぱりお面をつけてはるか彼方をにらんでいた。皆が目をそらしたものはこっぴどく叱られたクラスメート、じゃなくて感情がたかぶるたびに、無駄！無駄！と叫ぶ大人の方。その姿の向こう側に、自分たちを待つ未来がどんなものか透けて見えるから。

暗いのかな、やだなあ、怖いな。でも、まだ中学生になったばかりだし、先のことかな。きっと、あともうちょっとは知らんぷりができる。さあ、目と心を閉じよう。

そんなの当り前で、僕だって別の場面では便利なそのマスクをかぶるし、かぶってきた。きたんだけど、こうして席についている人間と、休み時間に走り回ってはしゃぐあの子たちが（って僕もその一員なんだけど）、同一人物と考えるといつも不思議な感覚になる。全員この顔のまま、一生席から動かないんじゃないのかな。そんな気がしてくる。

でも吉行、吉行はどうだろう。どんな顔をしてなんていう気持ちで座っているのか。僕の席からは、彼女の後ろ姿しか見えない。願わくは、皆と同じあの悲しいお面はつけていないで。僕の時だけは、少し困ったような表情を見せて。

「はい、よくできました。これからは気を付けるんですよ」

目の前には吉行の困り顔、の代わりに赤松先生のどうだ！って面(つら)。先生は満足そうに小鼻をぷくっと膨らませてほほ笑み、教卓へと戻っていった。僕はその後ろ姿に向かって、おい雷神と心の中でつぶやいてみる。勉強がストップして残念に思ってるやつは、誰もいないぞ。無表情からだって、そのくらいは読み取れるんだ。

さあ授業よ！と、ぱんと叩かれた手が合図だったみたいにお面は消えて、あーあ授業か、って少しあきらめた感じで皆は黒板に目をやった。